2026.9.27

諫早市小長井町井崎（いざき）支石墓の現状

今月 12 日に井崎支石墓が保存されている土地の所有者さんから「支石墓周辺の草刈りをしました。」というメールを、草刈り後の支石墓の写真を添えていただきました（次頁参照）。

井崎支石墓は鉄道敷設時の不時発見であったため、未調査のまま現在地に移転・保存されています。そのため、これまで本県も含めて、調査された他の支石墓に比べると情報量が少なく、論文などで取り上げられることも稀な遺跡です。

有明海湾奥に立地する支石墓として重要な遺跡と考えられるので、いただいた写真を紹介するにあたって井崎支石墓の概要もお伝えしたいと思います。

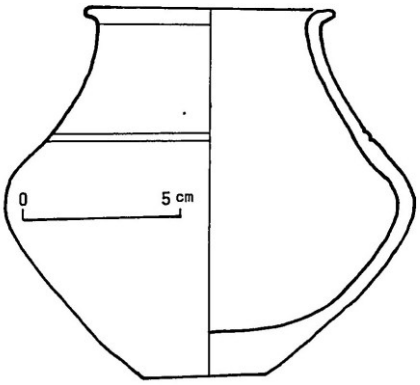
まず『原始古代の長崎県』（長崎県教委編 1999）に掲載された井崎支石墓の解説を引用します。

「井崎支石墓群はかつて、有明海に面した小長井港背後の丘陵にあったが、JR 長崎本線の工事が昭和 9（1934）年に行われたことによって消滅してしまった。（中略）昭和 9 年の鉄道工事の時に石を移転・復元したものが小長井町在住の藤山達祥氏宅の庭に遺っている。（中略）移築復元されているのは二基であるが、当時は一〇基近い数であったらしい。」と記載されています（正林 1997）。その他に「大石の下から発見された土器」として壺形土器が紹介されています。実測図は『小長井町郷土誌』から引用しました。同土器に関して『原始古代の長崎県』では「高さ約 12 ㌢の弥生土器で弥生前期半ばごろに属するものである。」と記されています。宮﨑貴夫氏の見解によれば土器型式は「夜臼Ⅱｂ式」で（宮﨑 2019）、佐賀平野の土器編年に照らすとⅢ期の夜臼Ⅱａ～夜臼Ⅱｂ式及び板付Ⅰ式の時期となるでしょう（中野 1997）。大村湾沿岸の編年ではⅢｂ期（板付Ⅰ式併行期）となると思います（中尾 2013）。相対年代では弥生前期前半で、実年代は現在の AMS-^{14}C 年代研究では、おおむね紀元前９世紀末～紀元前８世紀前半になるでしょう。

なお、井崎支石墓が移築・保存されている場所は、小長井郵便局前の道路をわたって左手にある民家の裏庭です。

【引用・参考文献】

中尾篤志 2013「土器編年と地域間関係」『新編大村市史』大村市史編さん委員会
中野 充 1997「佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年」立命館大学考古学論集１ 立命館大学考古学論集刊行会
正林 護 1976「小長井町の先史・古代」『小長井町郷土誌』小長井町郷土誌編纂委員会
正林 護 1997「井崎支石墓」『原始古代の長崎県』資料編Ⅱ長崎県教育委員会
宮﨑貴夫 2019『長崎地域の考古学研究』自費出版



第29図　井崎支石墓出土の土器実測図